

バルカン諸国歴史教科書の比較研究と柴宜弘先生

石田信一（跡見学園女子大学）

故柴宜弘先生には旧ユーゴスラヴィア近現代史あるいは日本との交流史を含むバルカン史全般にわたる多数の業績があり、その全体像を示すことは容易ではない。本稿では、柴先生の研究テーマの一つである「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」に焦点を絞って、その活動と成果を振り返ることとしたい¹。

ユーゴスラヴィアにおける民族対立が注目を浴びる一方、まだ国家の崩壊に至るとまでは予測できなかった1980年代後半に初めて柴先生にお会いした際には、すでに柴先生は東欧史研究会や日本ユーゴスラヴィア協会（現在の日本セルビア協会）などで中心的な役割を果たされていた。柴先生ご自身の研究成果はもとより、ユーゴスラヴィア近現代史に関する研究動向や現地事情の紹介、国際南東欧研究学会（AIESEE）等を通じたユーゴスラヴィアその他のバルカン諸国の研究者との交流の促進などを通じて、この地域を専門とする多くの研究者にとってかけがえのない存在であり続けた。ここでは、柴先生が主導され、私自身も参加した共同プロジェクトである「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」について、その背景、進展、そして継承という視点から紹介していく。

1. 「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」の背景

最初に結論めいたことを述べると、柴先生が進められた「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」は、各国の歴史教科書の分析および問題点の指摘にとどまらず、国民史を相対化しうるバルカンという地域史の視点の重要性を説き、その東アジアへの適用の可能性を開いたことに、大きな意味があると考えられる。ユーゴスラヴィア紛争が完全に終結したとはいえ、1990年代半ばから、いち早く各国における歴史研究と歴史教育の変化に注目し、近隣諸国・諸民族との関係を悪化させかねない自民族中心主義的なナショナル・ヒストリー、すなわち国民史への偏向に批判的な目を向けつつ、これを相対化しうる地域史という視点の重要性を指摘するとともに、歴史教育・歴史教科書の改善に向けた国際的な、そして旧ユーゴスラヴィア各国における動向を丹念にフォローしながら、その成果と限界を指摘し、広く発信し続けた。それにとどまらず、旧ユーゴスラヴィア研究者あるいはバルカン地域研究者を組織して、このテーマに関連した幾つもの共同研究

¹ 本稿は2021年11月27日に城西大学東京紀尾井町キャンパスで開催された「柴宜弘先生追悼シンポジウム～思い出と研究を語る」での報告内容に加筆・修正したものである。

プロジェクトを推進したこと、そしてその際に、一方では柴先生ご自身が築き上げた幅広いネットワークを活かして、旧ユーゴスラヴィア諸国を含む海外の研究者の積極的な参加を促したこと、もう一方では歴史教育に携わる現場の教員との接点を強化しようとしたことなど、この研究分野における柴先生の貢献は、語り尽くせないほどのものがある。

柴先生が1996年に出版された『ユーゴスラヴィア現代史』（岩波新書）は、今回取り上げた歴史教科書問題について、私自身が初めて関心を持ち、研究対象にすることを考えたきっかけとなる文献であった。その第5章「連邦解体への序曲」の冒頭に「歴史教科書叙述の比較」という項目があり、4頁にわたって1990年代半ばのセルビアとクロアチアの教科書の比較が試みられている。その一節を引用する。

「第二のユーゴ」の時期から、教科書は共和国ごとにそれぞれの言語と文字で発行されていたが、大枠の歴史認識にそれほどの違いは見られなかった。しかし、連邦が解体を迎えるなかで、独立国となったクロアチアやスロヴェニアではそれぞれの国民統合を図るため、従来の歴史叙述が大きく変化していく²。

セルビアとクロアチアの歴史教科書の叙述には大きな隔たりが見られる。両者の歴史認識の相違は、戦後の自主管理社会主義による統合の過程で埋められたかにみえたが、背後に押しやられていたにすぎず、「74年憲法体制」のもとでさらに拡大してしまった。それは80年代に「経済危機」が進行するに伴い、それぞれの民族主義傾向が強まるなかで、修復できないほどに広がっていたのである³。

ここではセルビアとクロアチアにおける歴史教科書の変化に限らず、両国における歴史認識の違いと、それがさらに拡大している状況について指摘していることを、非常に興味深く感じた。もっとも、この「歴史教科書叙述の比較」は『ユーゴスラヴィア現代史』の中でも、むしろエピソード的なものであって、必ずしもそれ自体を純粋な研究対象としたわけではなかった。実際、これ以降も、柴先生の関心が「歴史教科書叙述の比較」そのものに向くことはほとんどなく、各国で異なる歴史教科書叙述あるいは歴史認識をどう克服していくかという方向に向かうことになる。

このことについては、東欧史研究会2001年度シンポジウム「歴史教育の中の「東欧」」における柴宜弘先生の総括的なコメント「バルカン諸国共通の歴史認識をつくる試み」の中でも触れられている。

2000年8月には・・・「南東欧の歴史と歴史教育」というプロジェクトが始められた。・・・このプロジェクトの目的はバルカン諸国の自国中心的で隣国に対する偏見を強化する歴史教育の現状を反省し、

² 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』岩波書店（岩波新書）、1996年、132頁。

³ 同、135頁。

主として中等学校の教師向けだが大学の教員や学生にも役立つ、現存のものとは異なる教育用の資料や読み物を提供することであった。歴史教育用副読本の作成にあたり、従来無視されてきた南東欧諸国共通の文化を前面に押し出すことが合意され、バルカンに住む人々に共通する文化に焦点を当てる歴史人類学の手法を取り入れてテーマが選択された。副読本には、国民史と近隣諸国民史とのあいだに橋を架ける役割が与えられたといえる。

歴史教育用副読本が教育現場の教師からどのように評価され、実際にどのように使われているか定かではないが、バルカン諸国の歴史研究者や歴史教育関係者のネットワークづくりは国家の枠を超えて着実に進められている。韓国や中国とのあいだに共通の歴史認識をつくりあげるといふ課題をかかえたわれわれにとって、バルカン諸国共通の歴史認識をつくろうとする試みは、ポーランドとドイツ、チェコとドイツの歴史研究者の長年にもおよぶ対話の経験とともに学ぶべき点を数多く持っているといえる⁴。

ここで言及されている地域史的な視点をもった歴史教育用の副読本の作成の意義、歴史研究者や歴史教育関係者のネットワークづくりの重要性、そしてその東アジアへの適用の可能性は、その後も柴先生が一貫して主張していたことである。

2. 「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」の進展

このような日本にとっても参考となりうるバルカン諸国の歴史教育・歴史教科書の取り組みについて研究するために組織された研究プロジェクトが、柴先生を研究代表者とする「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」であり、2004年度から2007年度まで、科学研究費基盤研究Bとして助成を受けることができた。私自身も参加したが、旧ユーゴスラヴィア諸国からルーマニア、ブルガリア、アルバニア、トルコまでを含むバルカン全域を視野に入れ、それぞれの国を専門とする研究者が参加した挑戦的なプロジェクトであったといえる。このプロジェクトの研究概要を、報告書の中から引用して紹介する。

バルカン諸国の歴史教科書の記述を「バルカン」の地域史という枠組みから比較検討した。分析対象は第一にバルカン各国の中等教育で使用されている歴史教科書である。また、第二に現在バルカン諸国の歴史家および歴史教師が共同して進めているバルカン諸国の

⁴ 柴宜弘「コメントに代えて—バルカン諸国共通の歴史認識をつくる試み（2001年度シンポジウム—歴史教育の中の「東欧」）」『東欧史研究』第24号、2002年、99-101頁。

共通歴史副教材の作成プロジェクトにも着目し、このプロジェクトの紹介と分析も進めてきた。研究成果の発表の機会としては、2005年11月と2007年11月にそれぞれ国際シンポジウムを開催し、バルカン諸国と日本を含めた東アジアでの歴史教科書の記述の動向が紹介された。また、これらのシンポジウムでは、バルカン諸国の共通歴史副教材の作成プロジェクトや日中韓の枠組みで進められている歴史教材の作成の動きなど、両方の地域で進行している歴史教育用の共通教材の作成計画に関しても注目し、自国史の枠を相対化するその成果と問題点を検討した⁵。

ここで挙げられている2005年の国際シンポジウムは「地域史の可能性を求めて—バルカンと東アジアの歴史教科書から」、2007年の国際シンポジウムは『『地域史』をどのように構想・叙述し、どのように教育するか—バルカンと東アジアの事例から』というテーマのもので、アウグスタ・ディモウ（ギリシア）、ソーニャ・ドゥイモヴィチ（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ）、ヴァレンティナ・ドゥカ（アルバニア）、ヴォルフガング・ヘプケン（ドイツ）、シュテファン・イーリヒ（ドイツ）、カール・カーザー（オーストリア）、スニェジャナ・コレン（クロアチア）、クリスティナ・クルリ（ギリシア）、プレドラグ・マルコヴィチ（セルビア）、マーク・マゾワー（イギリス）、マリア・トドロヴァ（ブルガリア）、ペテル・ヴォドピヴェツ（スロヴェニア）らバルカン研究の第一線で活躍されている国際的に知られた研究者を招聘して開催されたものである。とくに前者の国際シンポジウムおよび関連するワークショップにおける刺激的な報告内容は、柴宜弘編『バルカン史と歴史教育—「地域史」とアイデンティティの再構築』（明石書店、2008年）に収録されており、これだけでも非常に重要な研究成果となっている。

また、必ずしもこのプロジェクトにおいて実現したものではないが、これに関連するものとして、2005年にギリシア北部のテッサロニキを拠点とするNGO「南東欧の民主主義と和解のためのセンター」、略称CDRSEEが企画・発行した共通歴史副教材「Teaching Modern Southeast European History. Alternative Educational Materials: Workbook 1-4」の日本語版の翻訳・刊行が、柴先生が中心となって実現し、『バルカンの歴史—バルカン近現代史の共通教材』（明石書店、2013年）として刊行されている。それはかねてより柴先生が重視してきたバルカン諸国の共通歴史副教材の一つであり、もともとの英語版では4分冊であったものを日本語版では1冊にまとめたため、大判で500頁を超えるものとなっている。柴先生は、本書の監訳をつとめ、巻末に詳しい解説も載せている。この共通歴史副教材は、セルビア語版、

⁵ 「2007年度研究成果報告書概要（バルカン諸国歴史教科書の比較研究）」、KAKEN 科学研究費助成事業データベース[https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-16320100/163201002007kenkyu_seika_hokoku_gaiyo/] 最終閲覧日 2022年2月20日。

ギリシア語版、クロアチア語版、マケドニア語版、ボスニア語版、アルバニア語版、モンテネグロ語版、ブルガリア語版が各国で出版されている。本書もまた、前述の『バルカン史と歴史教育』と並ぶ、この分野での重要な基礎文献となっている。

このバルカン諸国における歴史教育・歴史教科書の問題に関しては、柴先生はさまざまな旧ユーゴスラヴィア諸国間あるいはバルカン諸国全体の取り組みの紹介などを通じて、日本において積極的に一般向けにも情報発信をしてきた。その一つが、2005年に明石書店から刊行された柴先生が編著者となっている『バルカンを知るための65章』（第2版からは『バルカンを知るための66章』）に掲載されている「歴史教育から見た和解の試み—国民史を超えられるか」という章である。そこでは、自ら参加した経験談として2002年9月にクロアチアのブリュニ島で開催された「旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教育に関するラウンドテーブル」において各国からの参加者が他国の教育カリキュラムについての情報不足を相互に認識しあったことや、さきほど述べたCDRSEEがユーゴスラヴィア紛争で分断されてしまったバルカンを一つの地域として捉え、共通の歴史認識を作ることによってこの地域の対立を乗り越えようと試みていること、さらにオーストリアのグラーツ大学バルカン社会文化研究センターが「南東欧の歴史と歴史教育」プロジェクトを通じて、子どもとジェンダーに関する2冊の歴史副教材⁶を出版し、それもまたバルカン諸国の国民史の枠を越えて地域としてのバルカンの共通性を具体的に提示しようとしていることが紹介されている。「1990年代に新たに国家を建国した旧ユーゴ諸国にとっては、国民史を新たに作り上げるといった課題と同時に、バルカンあるいはヨーロッパという地域の歴史に向けて国民史を乗り越えていかなければならない現代的な課題をも負っている」⁷という指摘は、いまなお重要性を失っていない。

柴先生は歴史教育を通じた和解の試みに関して数多くの論考を発表しているが、2011年に発表した「歴史教育による和解の試み—バルカン諸国の場合」においては、これまでの研究成果から導かれるある種の結論として、バルカン諸国における共通歴史副教材の試みにについて、次のような重要な指摘を行っている。

- ①教育省が多大な権限をもつバルカンにおいては、国を超えた国民レベルの和解は、政治的な和解の進展に多大な影響を受けざるを得ない。歴史教育による国民レベルの和解に限界があることは、自覚

⁶ Milan Ristović, Dubravka Stojanović, eds., *Childhood in the Past: 19th and 20th Century. Additional Teaching Materials for Secondary Schools*, Beograd: Association for Social History, Beograd 2001; Kristina Popova, Petar Vodenicharov, Snezhana Dimitrova, *Women and Men in the Past: 19th and 20th Century. Additional Teaching Materials for Secondary Schools*, Blagoevgrad: South-Western University, 2002.

⁷ 柴宜弘「歴史教育から見た和解の試み—国民史を超えられるか」柴宜弘編『バルカンを知るための60章』明石書店、2005年、309頁。

しなければならない。

②日本、中国、韓国のあいだで、歴史研究者や歴史教員のさまざまなレベルの共同作業が20年以上にわたり続けられ、その成果として、統一的な共通の歴史叙述の試みも出版されている。この試みは大いに評価すべきだが、共通の叙述をするために、妥協点を見いださざるを得ず、必ずしも十分な叙述ができない。その点で、共通の史料集を副教材として用いて、教科書に対抗させるという方法は、東アジア3国の歴史教育にとっても有効ではないだろうか。

③CDRSEEのようなNGOが主催して、共通歴史副教材を実際の教育現場で用いるための教育のトレーニングを行い、この場に歴史研究者がボランティアでチューターを引き受けている。歴史研究者と歴史教員の連携は大いに学ぶべきことである⁸。

3. 「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」の継承

柴先生の歴史教育・歴史教科書への問題関心は「バルカン諸国歴史教科書の比較研究」が研究期間を終えたのちも失われることなく、2010年代には日本学術振興会の二国間交流事業として従来から密接な交流のあったペテル・ヴォドピヴェツ教授やジャルコ・ラザレヴィチ教授を通じてスロヴェニアとの共同研究が進められた。2010年度から2011年度にかけては「日本とスロヴェニアの歴史教科書比較研究」をテーマとして、また2014年度から2015年度にかけては「日本とスロヴェニアの歴史学研究および教科書による20世紀の比較研究」をテーマとして、日本とスロヴェニアの研究者によるワークショップを開催するなど、共同研究が進められた。前者の目的は、日本を含む東アジアとスロヴェニアを含むバルカンの事例を中心に自国史と地域史の問題を明らかにすることであり、ワークショップの報告内容は、2013年にスロヴェニアの現代史研究所から英語版の論文集⁹として刊行された。また、後者の目的は、日本を含む東アジアとスロヴェニアを含むバルカンの事例を中心に20世紀の歴史学研究と歴史教育・教科書を比較・検討することであり、同じくスロヴェニアの現代研究所から英語版の論文集¹⁰が刊行されている。なお、このプロジェクトの研究代表者は東京大学の三谷博先生がつとめられた時期があり、日本側参加者にはバルカン史研究者だけでなく日本史研究者も含まれていた。

さらに、2015年度から2020年度にかけては、柴先生の助言をうけ、「バ

⁸ 柴宜弘「歴史教育による和解の試み——バルカン諸国の場合」『アメリカ太平洋研究』第11号、2011年、17頁。

⁹ Nobuhiro Shiba et al. eds., *School History and Textbooks: A Comparative Analysis of History Textbooks in Japan and Slovenia*, Ljubljana: Institute of Contemporary History, 2013.

¹⁰ Žarko Lazarević, Nobuhiro Shiba, Kenta Suzuki eds., *The 20th Century through Historiographies and Textbooks: Chapters from Japan, East Asia, Slovenia and Southeast Europe*, Ljubljana: Institute of Contemporary History, 2018.

ルカン諸国歴史教科書の比較研究」を直接的に継承するものとして、「バルカン諸国の歴史教育から見た紛争と和解の研究」¹¹という共同研究プロジェクトを進めることとなった。この期間を通じて、定期的に研究会を開催し、バルカン諸国からクリスティナ・クルリ（ギリシア）、スニェジャナ・コレン（クロアチア）、ドゥブラヴカ・ストヤノヴィチ（セルビア）、ヴァレリ・コレフ（ブルガリア）らの研究者を招聘して公開講演会、シンポジウム、ワークショップ等を開催することができ、その研究成果を論文などの形で発表できたことには、一定の意味があったと考える。柴先生も積極的に参加・関与され、ご所属の中欧研究所で研究会を開催することもあった。このプロジェクトでは、前述の CDRSEE によるバルカン諸国の共通歴史副教材の続編にあたる現代史の史料集 2 冊¹²が 2016 年に刊行された機会に、日本語版の作成・発行を実現することを目標の一つに加えたが、残念ながら未完のままとなっている。

最近刊行された『ユーゴスラヴィア現代史 新版』（岩波新書、2021 年）でも、新たにクロアチアにおける歴史の見直しの動きやボスニアにおける歴史教育の実情などが取り上げられ、柴先生はなおこの問題に強い関心を持たれていたことが窺える。かつては対立的な記述が目立った旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書問題は、本稿でも取り上げた各国研究者の協力などにより大いに改善されたかに見えたが、近年では一部でナショナリズムの高揚とともに「逆行」現象が見られるケースも生じており、なお注視する必要がある。上記の共通歴史副教材の刊行を含めたこの研究のさらなる継承・発展が、私たちに残された宿題と言えるかも知れない。

¹¹ 「バルカン諸国の歴史教育から見た紛争と和解の研究」、KAKEN 科学研究費助成事業データベース [https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-15KT0046/] 最終閲覧日 2022 年 2 月 20 日。

¹² Christina Koulouri, ed., *Teaching Contemporary Southeast European History: Source Books for History Teachers, Volume 1: The Cold War (1944-1990), Volume 2: Wars, Divisions, Integration (1990-2008)*, Thessaloniki: CDRSEE, 2016.